

地獄變

雷羽
印

ちやわん なか

茶碗の、中

試し読み版

雷羽 著

Ground Top 小説

「地獄變-じごくへん-」

楽曲始、「THE RED MAGIC」 AK-69

楽曲終、「Schiele」 KELUN

登場人物

良秀（よしひで）

堀川大臣（ほりかわのおとど）

泰家（やすいえ）

本ファイルはサンプルです。

「地獄變」の始め二ページを試し読みできます。

以降は本編でお楽しみ下さい。

サンプルとして、一部内容が異なります。

開獄

平安時代、良秀は鬼才とも言われる絵仏師だった。というのも、彼が描くものは全て混々とし、大抵の者はそれが理解出来ないという。あるものはそれが罰当たりだとも、あるものはそれが革新だとも言った。とにかく、良秀の描く絵は平安の世からすれば忌諱たるものであり同時に人の心の奥底に迫るものであったとか。

良秀の数知れない話の中に、聞くものを恐々怖々とさせる話がある。そのうちのいくつかをご紹介します。

貴獄

この日は珍しく鄭重な色が良秀を飾り立てていた。狩衣を纏った良秀はまるで当たり前のように重門をくぐり抜けると、白石の眩しい広い庭を悠々と歩いていく。あちこちから似合わない烏帽子にくすくすと笑いが漏れる声が聞こえる廊下を抜けると、また広い京畳の間に腰を据える。

屋形の主は堀川大臣。出で立ちには母の元にかの大威徳明王が現れたとも云うし、京内を車で移動中、百鬼夜行に出会したときは「我が車を遮るとは憤するに絶えぬわ。」と妖怪を追い払ったともあるとか。色狂いとも名高い堀川大臣には、河原院に現れるという融左大臣の幽霊を顔を好んで犯したという噂もある。とにかくこの男は並外れた気配と肉欲を持つのである。

すらっとした顔立ちに少し力のある目元、怪しいほどに笑みを湛える口元は宮中でもひとときわ噂のたつ美形ではあるまいか。そんな顔を見ようともせず、良秀は畳を眺めている。

「絵仏師良秀。そちの噂は聞いておる。描く絵全てに魂が宿る、して人の醜さ卑しさ愚かさを淡々と伝えおるとか。」

「まこと、左様に申す者も。」

「そちに屏風を仕立てて欲しいと思うのだが、何難しいことではない。地獄変相を描いて欲しいと思う。」

「地獄変相と。」

堀川大臣は口角を隠すように扇を翳した。

堀川屋形には良秀の愛弟子である泰家が仕えている。良秀のもとでは二十年余の修行を経ているが、良秀とは違い生々しい絵を描くことをしない。この屋形に飾られている縁、襖、衝立、障子は彼の作であるが、堀川大臣はもっと新しいものを求めているようだった。そこで何かと京に噂を立てる良秀を呼んだという次第であろう。

「左様ならば、暫しの猶予を頂きたく。凡そ一年。」

「苦はなし。そちがそう言うのなら余は何も申さぬ。何か不足なりあらば何ごとでも伝え申せ。」

「してお願い致します。この良秀の弟子、泰家を我が許へ下して下されば仕合せにあります。」

失礼なことだと知りながら、つい口から漏れてしまったように。一度屋形に上げた弟子は簡単に外へ出ることも許されない。だが、何故だか良秀はよく泰家のことを周囲に自慢をしていたらしい。それを聞いた脇人に不快な空気が漂う。堀川大臣の眉間が険しい。その様子を窺い知る間もなく、堀川大臣は「そはならぬ。」と部屋を後にしたが、頭を下ろしたまま、暫く良秀は動くことはなかった。

次の日から良秀は地獄変相の屏風にとりかかった。光が遮断された中、薄暗い中に灯る十束の蠟燭。良秀の前には真っ白な二十尺ほどの屏風。ゆらゆらと揺らぐ白をじっと眺める良秀は手尺を取ったり、時々手を組み、顎に添え、幾分か悩んでいる様子を見せる。

戸の小さな隙間から弟子が覗いていると、急にかたりと戸が開き、眩しいのか目を細めながら良秀が足音を立てる。

「お師匠様、どちらへ。」

「模写をしにいく。紙と筆を持って来い。」

草履を取り出し、それを履き終えると弟子を待った。廊下の奥から弟子が紙と筆を持って出ると、それを掴み捕り、さっさと出かけて行ってしまった。呆気にとられる弟子たちから落胆のため息が漏れるのにそう時間はかからなかったのである。

平安時代、京を出ればすぐに過疎した光景が広がる。絢爛優美な京城内とは違い、地方は飢饉や干魃などの災害により深刻な貧困に陥っている村も少なくない。そこでは死体など探すに足らないのである。良秀はよくその死体を模写していた。

普通の人なら思わず顔を垂けるような漂う死臭。鼻を突くような底知れぬ腐敗の中で、良秀は一心不乱に筆を執った。かつては罰当たりだの怖いもの知らずだのと言われていたが、もはやそれを言う者など居なくなった。良秀の描く絵には魂が宿る、そう言われるのも無理はない。龍蓋寺の門に「五趣生死」を描いたときもそうだ。薄気味悪い門も相まって、そこを通ると溜息や泣き声が聴こえるとか、死臭が漂うとか、笛の音色や花果の香りが漂うなどとは無縁のなんとも生々しいかぎりである。それは全て模写あつてのことであろう。

日が暮れて、微かに灯る画廊に帰ると、弟子に脇目も振らずにさっさと部屋に籠ってしまった。両手には模写した何十枚という紙を携えて。良秀の作業光景は非常に鬼気迫るものがあるという。物音一つしない部屋を弟子が覗けば、異様な気が充満し、良秀はその中、胡座を組んで屏風と睨み合いをしている。口は何やら言うように動き、目は止まること無く、良秀の周りには青い狐がぼうつと浮かび上がっているように見える。覗く弟子も思わず息を呑んでしまうような、異界。

良秀に描かれた者は三年の命。そんな噂もある。模写されると魂が奪われるとか、根拠はないがこのような光景を見れば強ち疑う余地を持たない。

絵仏師どもから見れば邪道とも言える良秀だが、堀川大臣がその絵仏師をからかえば良秀は「醜いものの美などわかるはずもあるまいな。」と。全く他を寄せ付けない所も嫌われる所以であろうか。

それから何日も飲まず食わず。屏風に始めて線が描かれてからというもの、まるで取り憑かれたように屏風の前に付きっきりである。そうかと思えば、「散歩してくる」などどことなく出ていってしまう。

だがその日ばかりは弟子に言った。

「わしはさすがに疲れた。だが寝ようとするといつても悪い夢を見るのだ。」

「さようで。」

弟子は絵の具を溶き掻き混ぜながら、いつものことだと思った。このごろ、寝ている姿を見たことなど無い。だがさすがに三日三晩も寝ずに過ごすことは無理だろうから、どこかで寝てはいるのだろうと弟子たちの間では普通のことになっているのだ。

「昼寝をする間、側に居てくれないか。誰にも見られぬように見張るつもりでよい。」

思わず手が止まった。良秀が人に遠慮がましいことを言うなど聞いたことがない。弟子は「そのくらい構わないだろう。」と思いつつも、「承知しました。」と昼寝に付き合うことにした。

いつも絵を描く部屋に通されると、戸を閉めた。弟子の膝の上に頭を乗せると、心地を確かめるように数度頭を動かす。

「わしが眠っておる間、ここには誰も入れるなよ。」

「わかりました。」

それから暫くすると、良秀の体は全く動かなくなつた。頭の重みもずっしりと膝にかかる。

まだ二割も出来ていない屏風。端のほうには業火だろうか、黒々と燃える焰が中途半端に終わらせてある。ところどころにうっすらと補助線や下書きが描かれているが、この距離からだと蠟燭の明かりだけではよく見えない。床には散らばった模写。死体に火事、車、牛、鎖、棒、雲など、模写とは程遠く作品になりそうなほど本当に正確で緻密なものが無造作に捨てられている。

窓から日の光も差し込まない閉ざされた部屋で、半年近くも過ごしてたというのか。弟子はその狂気じみた執念に身震いさえ覚える。

半刻も経たないうち、良秀が急に唸りだした。気がつけばあつという間に汗だくになり、何やら訳の分からない独り言を呟き始める。険しい表情に変わったかと思えば、苦痛に唸るような表情になり、始終声にならない声を

地獄變 (サンプル)

著 者 雷羽
イラスト 雷羽
発 行 二〇一一年一月
管理コード df-823911wbvp_s
著 作 権 Ground Top by LeiYu
定 価 試供品

個人販売元

Ground Top <http://groundtop.sakura.ne.jp/>
雷 羽 banji.jp@gmail.com

Printed in Tokyo, Japan.
All Right Reserved.